南無妙法蓮華経

正月一八日

ストラスブルグ

合掌

本日午前十一時四十分頃、昨晩緊急病棟から自宅に返されたサイド・アミン・イブラギモフ氏は娘家族、親族六名、それにミカエル、二十一歳の大学生イブラヒム、ノルウェーから支援にかけつけたハッサ氏、それに私を加えた少人数サークルに囲まれて、一杯のグラスのグレープフルツジュースを口にして、四十日間の無期限断食にピリオドを打った。グラスを手に、ソファに横たわったままのサイド・アミンは長い間の断食闘争中、欧州、アメリカ、ロシアから寄せられた支持のメッセージや支援の人たちに思いをはせ、感謝の言葉をのべ、今ここにつどう本当に身内の側近の人々のサポートを心から感謝した。重大なときにい合わすことができた私にも、一生の心の友人、われわれチェチェンの心の教師だと過分の感謝の言葉をいただいた。はじめて親族の家に本当に安堵のよろこびの笑顔が戻った。

この孤独なサイド・アミン氏の非暴力闘争が実にこのわずかの身内の人々の献身的なサポートだけでほとんど素人の人たちが数台の携帯と一台のコンピュータを使って世界に発信しつづけたことは驚くほかはない。

マスメディアの無視、欧州フランスの人々の支援の不在、既成のチェチェンリーダーたちの非協力に直面しつつ、彼らはたんたんとこの孤独な戦いをになってきた。ほとんどなんのとらわれもなく今このよろこびを分かち合う人びとのむねのうちを思うと涙なしではいられない。ここにいるだれもが知っている。サイド・アミン氏は命の極限の限界まで闘ったのだ、どういう因果か私はこれで二度サイド・アミン氏の命を救ったことになる。

今朝十時すぎ、欧州評議会から法と人権委員会の事務局グェンター・シマー氏が氏の親書を携えサイド・アミン氏を訪ねた。フランスチャンネル２のテレビクルーが同行した。テレビカメラの前でっサイド・アミン氏はこの非暴力断食闘争の動機を述べ、世界の両親の人々の支持の声明欧州評議会や議員達の前向きな対応が、これからのチェチェンの正義と自由の戦いに一定の新しい一ページを開いたとして断食の中止を宣言した。

欧州評議会側は彼らの善意と良心からというよりも何としてもおひざ元でこのチェチェン人権活動家が断食で命を落とした場合のバックラッシュをおそれたに違いない。欧州政治のダブルスタンダードと打算のかけひきのからくりに、サイド・アミン氏の捨て身の非暴力直接行動は真剣勝負を挑んだと言っていいだろう。確かに新しい一ページが開かれたのだ。

ポストソビエトのこの十五年間のチェチェン戦争は確かに陰惨で残酷なジェノサイドである。幾人もの若者が救国と自由のために命を捨てたことであろう。幾人の人びとが闇の中で無念の死

をとげたことであろう。しかしこの武装レジスタンスはあくまで受け身の消極的な武装闘争ではあっても、チェチェンジェノサイドを見てみぬふりをしつづける世界の心を変えることはできなかった。

しかし今ついにチェチェンの人々は非暴力、慈悲、真実という無形の心の武器だけで積極的に全世界そのものを変えうる真の勇者の道が在することに気づき始めようとしている。

このためにこそ身命を捨ててかえりみない不滅の大道が開かれようとしている。報復と憎しみではなく全世界が共に平和を生きる希望を作り出す道である。

サイド・アミン氏の孤独な身命の犠牲の行為は新しいチェチェンの世代にこの可能性を実証した。報いて余りある偉大な成果だ。

寺沢潤世

日本チェチェン支援グループの皆様

送金ありがとうございました。本日全額受け取りました。キルギスにいるイスラムとキエフのセルゲイ師がスイスビザを受け取り早急に呼び寄せます。

あたらしいチェチェンの運動の始まりに欧州に今月一杯止まって新しい人々のつながりを作りたいと思います。二月二十五日前にはウクライナ・中央アジア・中国経由で帰国するつもりです明日イスラムを迎えるため、ジュネーブに発ちます。今日晩まで同じホテルです。ジュネーブはＩＰＢとマンダートに十九―二十一と滞在し、またストラスブルグに戻ります。

私のホテルの番号　部屋番号６６

ＴＥＬ：＋３３（０）３―８８―３２３５００

ＦＡＸ：＋３３（０）３―８８―２３５１９２

ミカエルの携帯

＋３３（０）６３１―３５１―６９４